

須田平野古墳 2024 年度発掘調査の成果

京丹後市教育委員会文化財保存活用課
京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

須田平野古墳は京丹後市久美浜町須田区に所在する古墳です。川上谷川に注ぐ伯耆谷川右岸の徳良山からのびる尾根の先端に位置しています。その石室形態などから、6世紀後半に築造された湯舟坂 2 号墳に先行する首長墓と考えられてきましたが、これまでに発掘調査がおこなわれたことはなく、その評価は定まっていませんでした。

京丹後市教育委員会と京都府立大学文学部考古学研究室では、2020 年度から湯舟坂 2 号墳およびその周辺に分布する古墳の学術的価値を再評価し、地域資源として活用するための取り組み（湯舟坂プロジェクト）をおこなっています。このプロジェクトの一環で、2022 年度には須田平野古墳の墳丘測量と横穴式石室の実測を、2023 年度には墳丘の発掘調査を実施しました。今年度の調査は、昨年度の調査を受け改めて墳丘や周溝の形状、墳丘南東方の須恵器散布地の性格を確認するとともに、横穴式石室の構造、規模を明らかにすることを主な目的としています。

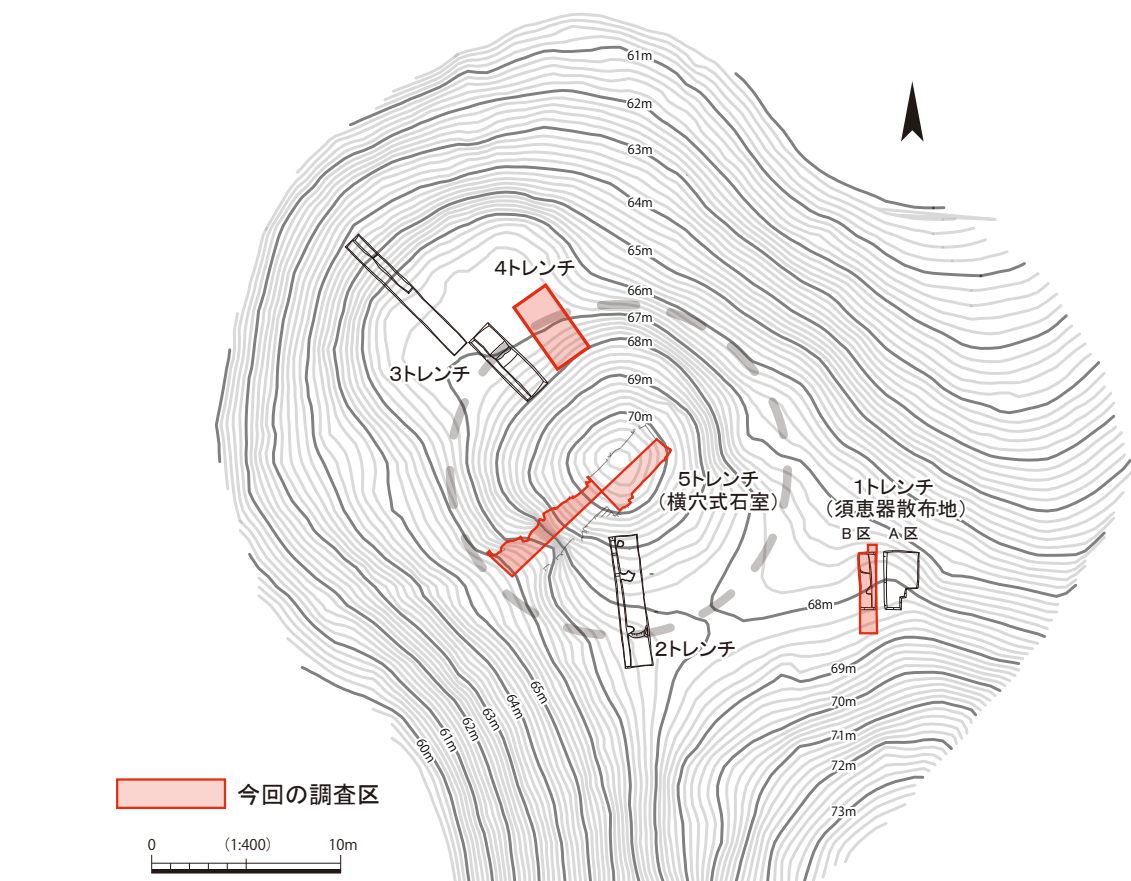


図1 須田平野古墳の墳丘と今回の調査区

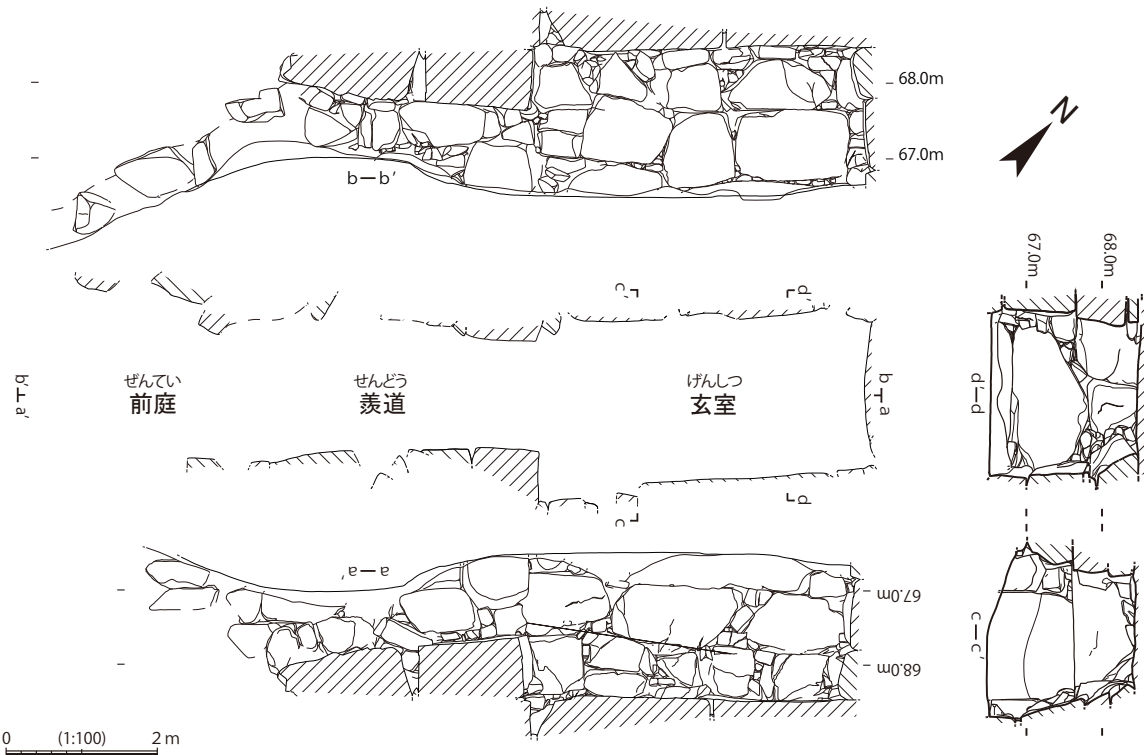


図2 須田平野古墳の横穴式石室

須田平野古墳の主な来歴

- 1920 年 『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊刊行
円墳と報告され、梅原末治氏による石室実測図が掲載される。
「熊野郡ニ於イテハ最モ大ナル古墳ノ一」と評される。
- 1923 年 『京都府熊野郡誌』刊行
- 1968 年 同志社大学考古学研究会による墳丘測量・石室実測調査
新たに方墳の可能性が提示される。
- 1983 年 『湯舟坂2号墳』での評価
奥村清一郎氏によって前方後円墳の可能性が提示される。
- 2004 年 『久美浜町史』刊行
石室構造をもとに、築造時期を古墳時代後期後葉とする。
- 2010 年 『京丹後市の考古資料』（京丹後市史資料編）刊行
石室構造から、伯耆谷の古墳群の中で最古の横穴式石室墳とされる。
- 2022 年 京都府立大学文学部考古学研究室による墳丘測量・石室実測
円墳の可能性が高いことを指摘する。
- 2023 年 京都府立大学文学部考古学研究室による発掘調査
周溝を検出し、直径 17m の円墳であることを確認する。

2. 今回の調査成果

1 トレンチ B 区（須恵器散布地）

墳丘南東方にひろがっていた須恵器散布地の性格を明らかにすることを目的として、昨年度調査区を拡張するかたちで南北 5.0 × 東西 0.9 m の調査区を設定しました。調査区中央では地山を人為的に削り出してつくった二段の平坦面を確認し、その上面に散布していた須恵器片がほぼ原位置を留めていることがわかりました。また下段平坦面からは底面に須恵器の甕の破片を敷いた南北 0.8 m、東西 0.4 m、深さ 0.4 m の楕円形土坑を検出しました。土坑内部には炭層と焼土ブロックが混じる層が確認され、須田平野古墳とほぼ同時期にこの平坦面上で、須恵器や火を用いた何らかの行為がおこなわれていたことがわかりました。



写真1 1トレンチ B 区全景
（北から）



写真2 土坑検出状況
（東から）

4 トレンチ（墳丘・周溝）

昨年の発掘調査において3トレンチで検出した周溝が墳丘北方にかけてどのようにめぐっていくのかを確認するため、南北 4.0 × 東西 2.0 m の調査区を設定しました。調査区南部では墳丘盛土を確認しました。墳丘は3トレンチと同様に後世に何らかの理由で大きく削平されていましたが、地山を水平に削り出して基盤面とし、土質の異なる盛土を積み上げて築造していることがわかりました。

調査区中央では東西溝（幅 1.8 m、深さ 0.4 m 以上）を検出しました。昨年度に3トレンチでみつかった溝と一連のものとみられ、古墳の周溝であることが確定しました。周溝上面には土坑が掘りこまれており、周溝の埋没後にも人の活動があったこともわかりました。このほかにも墳丘側からの流土の中から須恵器の高杯などが出土しました。



写真3 4トレンチ全景
（北西から）

5 トレンチ（横穴式石室）

横穴式石室の規模や構造などを確認するために石室内部～前庭部に約 18 m² の調査区を設定しました。調査の結果、玄室長 4.4 m、羨道長 3.5 m、前庭長 1.6 m 以上をはかり、全長 9.5 m 以上の石室であることが明らかとなりました。また、前庭が外側に向かってハの字形に開く形状をしていることも確かめられました。

玄室内の堆積の上層では炭が面的に広がる場所が検出され、周囲からは木炭や黒色土器のかげらが出土しました。前庭付近のこれと対応する層からは、寛永通宝のさし銭もみつかり、須田平野古墳が後世にも利用されていたことを知る手がかりが得られました。また、玄室奥壁付近にはこの炭層の上から掘られた盗掘孔も確認されました。石室内部については来年度以降も調査を継続する予定です。



写真4 羨道から前庭にかけての状況
（南から）



写真5 玄室内部の炭層の状況
（北西から）

3. 調査成果のまとめ

【5トレンチ】

石室の規模が明らかとなりました。玄室長 4.4 m、羨道長 3.5 m、前庭長 1.6 m 以上、全長 9.5 m 以上の石室で、これは川上谷川流域では湯舟坂2号墳に次ぐ大きさです。ハの字形に開く前庭は湯舟坂2号墳と共通し、両者の関係を考える新たな手がかりが得られました。玄室内部では、江戸時代と思われる後世の遺構面が確認されました。

【4トレンチ】

墳丘西方で確認されていた溝が北方にも続き、古墳の周溝であることが確定しました。

【1トレンチ】

墳丘南東方にひろがっていた須恵器散布地が地山を人為的に削り出してつくった二段の平坦面であることが判明しました。また下段平坦面上では、須田平野古墳とほぼ同時期に、須恵器甕の破片を敷いた上で火を用いた何らかの行為をしていたことを確認しました。

調査機関：京丹後市教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室

調査協力：京丹後市久美浜町須田区

調査参加者：菱田哲郎・諫早直人（教員）・瀬川裕太郎（博士前期課程2年）・西島翼・山内愛弓・横白彩江（博士前期課程1年）・石川達葵・岡崎壮太・越川輝・依田萌奈（学部4年）・栗田晋吾・鮫島聖斗・多田一郎・藤井まつり・和田佳織（学部3年）・角南博紀・平田有香（学部2年）